アラスカ　コバック川航行

49 代　片岡賢佑

隊員　CL 片岡賢佑（49 代）SL 塚本麻衣子（50 代）木下祐作（49 代）

期間　２００６年7月３０日ー９月１６日

場所　アメリカ合衆国　アラスカ州

コバック川　（Walker lakeーNoorvik）494 km

目的　1　極北の原野にて、コバック川 464ｋｍを航行する。

2　コバック川流域でエスキモーたちの文化を調査する。

行動スケジュール

日付	内容
７／　３０	大阪出発。成田空港へ移動
３１	成田空港出発　Fairbanks 空港着
３０* ー ８／　７	Fairbanks 滞在。食糧買出しなど。
８	Fairbanks 発　Bettles 着
９	Bettles 発　Walker Lake 着
１０ ー９／３	Kobuk 川航行
４	Noolvik 発　Fairbanks 着
５ー１３	Fairbanks 滞在
１４、１５	Fairbanks 空港発　成田空港着
１６	成田空港発　大阪着　解散

コバック川航行表

日付	地名		距離
8／　9	Walker Lake	C 1	0km　(累計)
10		C 1	
11		C 2	5km
12		C 2	
13	Kobuk Canyon	C 3	45km
14		C 4	55km
15		C 5	35km
16	Kobuk	C 6	40km　(180km)
17		C 6	
18		C 6	
19	Shungnak	C 7	17km　(197km)
20		C 7	
21		C 7	
22		C 7	
23		C 8	40km
24	Ambler	C 9	46km　(283km)
25		C 9	
26		C 9	
27		C 10	17km
28		C 11	34km
29		C 12	41km
30		C 13	30km
31		C 14	29km
9／　1	Kiana*	C 15	15km　(449km)
2		C 16	28km
3	Noorvik	C 17	17km　(494km)

総航行距離　494km

果てしなく広がる極北の原野
大地には動物たちの足跡
夜空にはオーロラ
北緯６６度北極圏

2006 年夏、我々はアラスカ北極圏コバック川の航行を行った。

コバック川は北緯 68 度のブルックス山脈を源としチュクチ海までの約 480 ｋｍを北緯 66 度 33 分線と平行に流れる川である。周辺は永久凍土、ツンドラの大地であり、まだらに点在する樹木以外はブルーベリーをはじめとする背の低い植物の原野である。

流域には５つのエスキモーの村が存在し、その人口は合計で 2000 人足らずである。外界との交通手段は水路、空路のみ。人間以外にも、熊、カリブー、サーモンなど様々な動物が数多く生息している。

このような極北の大地と、大国アメリカで暮らす先住民エスキモーに魅せられてこの計画はスタートした。

この計画の目的は、

１．コバック川　Walker Lake ー Noorvik までの 464 ㎞をカヌーで航行すること、

２．現在のエスキモーの生活を調査すること

にあった。

コバック川は古くから「エスキモーの道」として使用されてきた。そのため、この航行に探検的意味は無かった。しかしながら、人力のカヌーで航行しながら常に捕食者である熊の存在を意識して生活することは我々に生物としての本来の感覚を思い出させた。

朝、キャンプ地付近に真新しい熊の足跡を発見した時などは竦みあがり、神仏にただただ感謝したものである。

熊以外にも絶え間なく聞こえる狼の遠吠え、2mをゆうに越す大鹿ムース、ツンドラの大地が見事に織り成す紅葉のモザイクなど、ダイナミックであり繊細な極北の大自然に溶け込むことができた。

中流域からはエスキモーの集落が存

在している。彼らの生活は物流の発達により、予想通りほとんど都市での生活と変わらなかった。あらゆる物資は都市から空輸で運ばれ、生活必要品は何一つ不自由なく村の店で買うことができる。

政府からの先住民保護の生活保障で働く必要がないためか、酔っ払いや薬物中毒者で治安も良くなかった。

そんな中、今なお続いている昔からの生活といえば狩猟であった。網でサーモンを獲り、野山でカリブーを追い回す。酒に浸り薬物におぼれる者もこのときばかりは生き生きとしていた。狩猟民族エスキモーが今尚生きていた。

遠征は大きな事故もなく無事終えることができた。現在我々は時間制限、情報化、大量消費、と普通の都市生活を送っている。しかし、そんなことお構いなしに今でもあの大地では我が物顔で熊がノソノソ歩き、食べられることの無い大量のブルーベリーが熟し、エスキモーたちは意味も無くバギーを乗り回しているのであろう。

帰国してから時々ふとそんなことを考えて微笑んでしまう。ちょうど今頃はカリブーの移動の季節。今年は豊漁だろうか。彼らはきっとそわそわしているのだろう。

（49代 ／CL記）